

ヴァチカン図書館の 中國關連蒐集について

高田時雄

その來源

今日ヴァチカン図書館に所藏される中國書あるいは中國に関する文書類は、なんらかの組織的な規準に基づいて集められたものでは決してなく、すべてがその時々気紛れな寄贈に基づくものであった、といっても過言ではない。またある時点で必要な書物を補充するというようなことも全くなかったために、その内容は極めて雑多であるとともに、かつかなり偏ったものである。したがってこの蒐集は大學の中國學科のそれとは全く性格を異にしており、それを中國學の參考圖書館として利用するようなことは到底考えられない。しかしながら、ヴァチカンがカトリックの大本山であり、初期のヨーロッパ中國學がもっぱらイエズス會士を初めとするカトリック宣教師の手に委ねられていたという歴史的事情から、この圖書館には耶蘇會版をはじめとして、布教關連の稀覯書が多く、また宣教師が中國に関する知識を得るために中國で蒐集した書物の中に意外な稀覯書があったりする。また宣教師自身が漢文やラテン文、フランス文で書き残した著述の稿本類も少なからず残されている。その意味で多分にわれわれの注意を引くものであることは贅言を要しない。

ところでヴァチカン図書館には相當早くから中國書が齎されていたらしい。ゴンサーレス・メンドーサが著した『シナ大王國志』には當時のヨーロッパにおける中國書の收藏について次のように書いている。

「(中國の書物は)今日、ローマの聖殿の圖書館や(フェリペ二世)陛下が王室サン・ロレンソ修道院に設立された圖書館、またその他の場所でも見る事が出来る。」¹

¹“se puede ver oy en Roma en la Bibliotheca del sacro Palacio, y en la que su Magestad a hecho en el Monasterio de san Lorenzo el real, y en otras partes....” (Juan González de Mendoza, *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres.....*, Roma, 1585. Libro Tercero, Cap.XIII, p.105.

『シナ大王國志』は一五八五年ローマで初版を出したが、そのほぼ同じ頃にヴァチカンで中國書を見た人物がもう一人いる。「エッセー」で名高いかのモンテニョがその人で、彼は一五八一年三月六日、ヴァチカン図書館を訪問、セネカやプルタークなどととも、そこで一冊の中國書を見たとき書き残している。

「そこで(ヴァチカンで)一冊の中國書を見た。妙ちきりんな感じ。我々の紙よりもずっと柔らかく透き通った素材の用紙。インクの滲みに堪えきれないので、用紙の一面にしか文字が書かれず、その用紙はすべて外側の端から二重に折りこんで、しっかり保つようにしてある。」²

これらの中國書は宣教師の手によりイベリア半島經由で齎されたものに違いない。東方航路を支配していたスペイン・ポルトガルには早くから中國の品物が舶載されていた。メンドーサがヴァチカンとともに挙げるサン・ロレンソ修道院の圖書館、すなわちマドリー近郊のエル・エスコリアル(El Escorial)には、もとイエズス會士であったポルトガル人、グレゴリオ・ゴンサルベス(Gregorio González)によって齎された中國書が今も所藏されている³。イエズス會最初の中國宣教師の一人ミケーレ・ルツジェーリ(Michele Ruggieri, 1543-1607)は一五九〇年にローマに歸着し、中國書を持ち歸っている。

²“J’y vit un livre de China (sic), le caractere sauvage, les feuilles de certene matiere beaucoup plus tendre et pellucide que notre papier; et parce que elle ne peut souffrir la teinture de l’ancre, il n’est escrit que d’un coté de la feuille, et les feuilles sont toutes doubles et pliées par le bout de dehors où elles se tiennent.” (Montaigne, *Journal de Voyage en Italie*, Ed. Garnier, 1955, Paris, p.114.

³Gregorio de Andrés, O.S.A., *Los Libros chinos de la Real Biblioteca de el Escorial, Missionalia Hispanica*, XXIV, No. 76, 1969, pp.115-123. また、この論文に依據した榎一雄「漢字の西方傳播」、もと『月刊シルクロード』第四卷第六～八、十號(一九七八年七～十二月)、いま『著作集』第四卷(一九九三、汲古書院)に収録。その二二〇～二二四頁を参照されたい。Gregorio de Andrés 氏の論文のコピーは關西大學の井上泰山氏の御好意で入手し得た。記して感謝する。

る。それがヴァチカンに歸した可能性がある。しかし詳しいことは分かっていない⁴。またメンドーサやモンテーニュの記録によって十六世紀の末に確實に存在した中國書も、現在のヴァチカン圖書館中になお存在するのかどうか、また存在するとしても現蔵書のどれがこういった初期蒐集に屬するものかということも明かではない。以下、現在所蔵されるものにつき、比較的來歴の明らかなものを順次見ていくこととしよう。

現在のヴァチカンの中國蒐集のうちで、收藏の経緯がはっきりとわかる最も古いものはパラティン・コレクション (Fondo Palatino) 中のものである。これはドイツの三十年戦争においてババリアのマクシミリアンがハイデルベルクを占據したことにより、パラティン (ファルツ) 選挙侯フレデリック五世の蔵書を教皇グレゴリオ十五世に譲渡することとなったものである。実際にこのコレクションがヴァチカンに到着したのは次ぎの教皇ウルバヌス八世治世下の1623年であった。このパラティン・コレクション中には中國書のみならず、東洋語で書かれた寫本が多く、このコレクションの到着によってヴァチカンの東洋蒐集は急に豊かになったといわれる⁵。現在このパラティン・コレクション中には、水滸傳の明末刊本二種 (ともに不全) を含めて七點の中國書が存在する⁶。

次いでヴァチカンに入ったのは、イエズス會が中國各地で出版した教理と科學に関する一連の書物である。

これら耶蘇會版は一六八二年にフランスのイエズス會士クプレ (Philippe Couplet, 1622-1692) が一時ヨーロッパに歸った際に齎したものである。その時一緒に持ち歸ったものと推測される出版目録「天主聖教目録」「曆法格物窮理書目」も今日ヴァチカンに保存され、對應するラテン語の目録もある⁷。目録中の書物のすべてが保存されている譯ではないが、耶蘇會版の尤品が

⁴ Donald Lach, *Asia in the Making of Europe*, Vol. II, Chicago 1977, pp. 53, 528.

⁵ Jeanne Bignami Odier, *La Bibliothèque Vaticane de Sixte IV à Pie XI*, Vatican 1973, pp. 107, 112.

⁶ ペリオが1922年にヴァチカンの中國書の草目を作ったときには、これらの書物はなお初期蒐集 (Prima Raccolta) 中に含まれていた。

⁷ Vat. lat. 13201. f. 281-294v *Catalogus librorum Sinicorum quos annuente SSmo D. N. Innocentio XI. Philippus Couplet Soc: Iesu Procurator Missionis Sinicae Bibliothecae Vaticanae dono dedit Anno Dm. MDCLXXXV*. Giorgio Levi Della Vida, *Ricerche sulla Formazione del più antico Fondo dei Manoscritti Orientali della Biblioteca Vaticana*, Vatican 1939, p. 8 を参照。これによればクプレがヴァチカンに中國書を寄贈したのは一六八五年のことであるのが分かる。最初にこのラテン語目録の存在に注意を向けてくれた友人 Francesco D'Arelli に感謝する。

よく揃っている。とくに「西字奇蹟」は他に所蔵されていることを聞かない⁸。このクプレ將來書は現在、東洋一般蒐集 (Raccolta Generale Oriente) の第三部分の202から246を占めている。

同じく東洋一般蒐集の第三部、247から268まではフランシスコ會のカロルス・オラツィイ・カストラノ神父 (Carolus Orazi de Castorano, 1673-1755) の残した資料である。カストラノは一七〇〇年に中國に着き、山東と北京で布教活動に従事したが、典禮問題による紛糾のすえ1734年にイタリアに戻った。彼の残した資料はその死後、最終的にヴァチカンに歸した。その多くが布教関係の書物であるのは當然であるが、ほかにも四書五經や千字文を初めとする童蒙書、文公家禮、天下路程などの書名が見える。彼の残した寫本類は別に極東コレクション (Vaticano Estr. Oriente) に収められている。その中にはカストラノ自筆の辭書や文法、また受洗者名簿などが含まれる。

フランスのイエズス會士ジャン・フランソワ・フーケット (Jean-François Foucquet, 1665-1741) は大量の中國書をパリの王立圖書館の爲に購入したことで有名であるが⁹、彼自身の中國に関してラテン語で認めた寫本がその死の直後に一七四一年三月十五日付けでヴァチカンに遺贈された¹⁰。フーケットの他の寫本 (フランス語で書かれたものなど) は下に述べるボルジア・コレクション中にも存在する。

ずっと時代が下って一九〇二年に布教聖省 (Congregatio de Propaganda Fide) から移管された大量の圖書のうち、バルベリーニ・コレクション (Fondo Barberini Orientale) とボルジア・コレクション (Fondo Borgia Cinese) とが含まれていた。前者は寫本・刊本あわせても三十點足らずに過ぎないが、その中では原帙を保存する『天學初函』や萬曆刊の『不求人』『萬寶全書』『文林廣記』などの民間類書が注意される。後者のボルジア・コレクションは點數にして五三六點で、質量ともにヴァチカン最大のコレクションである。布教聖省はグレゴリオ十五世によって一六二二年一月六日に設立されたも

⁸ これは『程氏墨苑』に収録されたものの原刻本である。王重民「羅馬訪書記」、『圖書季刊』3-4 (1936)、後『冷廬文藪』(1992 上海古籍出版社) に収録。その頁 801 を参照。

⁹ Cf. John W. Witek, Jean-François Foucquet et les livres chinois de la Bibliothèque Royale, *Les Rapports entre la Chine et l'Europe au temps des Lumières* (Actes du IIe Colloque international de sinologie), Paris 1980, pp. 145-171.

¹⁰ これは現在 Vat. lat. 12851-12867 として所蔵される。Cf. Odier, *op. cit.*, p. 176, note 92.

のであるが、海外布教を管轄する任務を帯びていたため、ここに大量の中國關係書が蓄積されることになった。上にフーケットの寫本がボルジア・コレクション中にもあることを指摘したが、今日ボルジア・コレクションに屬する中國書の中にはフーケットによって中國から持ち歸られたもの含まれている可能性がある。フーケットがその持ち歸った中國書のすべてをフランス王立圖書館に納めたとは考えにくい。

ボルジア・コレクション中でもう一つ注意されるのはイタリアのシエナに生まれた中國學者アントニオ・モントゥッチ (Antonio Montucci, 1762-1829) の舊藏書である。モントゥッチは中國語辭書の出版にその生涯を費やした人物で、最初ロンドンで活動し、後プロシヤ王フリードリヒ・ヴィルヘルムの後援でベルリンに移り、孜孜として中國語辭書の編纂に従事していたが、ナポレオン戦争のために挫折、晩年夢破れてイタリアに歸り、すべての藏書と稿本、そして中國語辭書のために作製した活字二萬九千を教皇レオ十二世に譲渡した。これらは一八二九年、布教聖省に入り、後一九〇二年に及んでまたヴァチカン圖書館に歸したわけである。モントゥッチの藏書は、その目的とした所が中國語辭書編纂にあったためであろう、『字彙』『正字通』を初めとする各種の中國辭書、さらに宣教師の編纂した對譯辭書などが非常に丹念に集められている。モントゥッチはこれらの書物を非常に苦勞して、時には相當な金額を支拂って蒐集した。本の扉の内側に取引の際の手紙や領收書が貼付されてあって、入手のいきさつの分かるものが間々ある。モントゥッチは可成りの書物をクラブロート (Julius Klaproth, 1783-1835) から買っている。

その他、中國書を含む小さな蒐集が幾つか存在する。極東蒐集 (Fondo Vaticano Estremo Oriente) は寫本部に屬し、大部分がヨーロッパ語で書かれた資料であるが、宣教師による中國語辭書、文法が豊富である。また折りに觸れて寄贈される中國書は東洋一般蒐集に屬することになり、現在第六部にまで及んでいる。

大戦後の新しい増加で特記すべきものは、ローマ大學教授であったヴァッカ (Giovanni Vacca, 1872-1953) の藏書がその死後に齎されたことである。もともと數學から出發したというこの人物の藏書には、算學書をはじめとする理科の書が多いのが特長である。また地方志が割合目に着くのは、ヴァッカはローマ大學で東アジアの歴史と地理とを擔當していたというから、その

必要上この種のもを集めたのであろう。他には道教や回教の書物も見えるが、多方面に渡るその蒐集は總計三、四〇〇種類と言われる¹¹。

(次號に續く)

『日佛東洋學會通信』第 20 號 (1995 年 12 月)

¹¹Cf. Yves Hervouet, Les Bibliothèques chinoises d'Europe occidentale, *Mélanges publiés par L'Institut des Hautes Etudes chinoises*, Tome Premier, Paris 1957, p. 498.